

# 地域コミュニティの 防災力

連載 第30回

## 5年半目を迎えた東日本大震災



常葉大学大学院 環境防災研究科 教授  
重川 希志依

### 1. あの日のこと

私のゼミでは毎年、3年生の学生を対象として東日本大震災の被災地研修を福島県で実施しています。震災と原発事故の影響を受けた多くの方たちの生活再建の取組を学ばせていただくこと、さらに、私自身はおそらく見ることができないであろう原発の廃炉作業完了と安全収束までの過程を学生たちに見届けて欲しいという気持ちがあるからです。

この研修で毎年必ず立ち寄らせていただくの



写真1 福島県富岡町仮設住宅（いわき市内）

が、福島県いわき市内に設けられた福島県富岡町の仮設住宅です(写真1)。そこで暮らすNさん(60代・女性)から震災当時のこと、富岡町の仮設住宅で暮らす皆さんのその後の生活再建の様子などを聞かせていただくことが目的となっています。富岡町は福島第一原発から10～20km圏内に位置しており、震災当時の人口は16,000人、町内は帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域の3種類に区分され、いまだ人の住める場所がないという状況が続いています(図1)。

5年前の3月11日、Nさんは富岡町の北に位置する浪江町の老健施設で介護職の仕事に携わっていました。当時施設で勤務していた職員は40人、施設にいたのはデイサービス利用者、認知症のある多数の入所者あわせて119名のお年寄りでした。震災当日の夜、停電はしなかったものの余震が激しく、施設内のホールにベッドを並べ、お年寄りたちをそこで寝かせて一夜を明かしました。認知症の人、経管栄養の人など様々な状

# 地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

態の人が区切りのない大きなフロアで一緒に過ごすために、普段では起こらないような問題も次々と発生したようです。しかし、食事、排泄、見守りなど「いつもと同じ介助をしよう」を合言葉に、40人の職員の皆さんはその後4日間にわたり、不眠不食のような状況のまま119人のお年寄りの生命を守りながら、4箇所の避難先を転々と移動することとなりました。健康な若い人たちがさえ大変な苦労を強いられた当時の避難行動だったのですが、福祉施設では避難しながら介護するという、さらに過酷な状況に耐えながら多くのお年寄りの生命が守られていました。

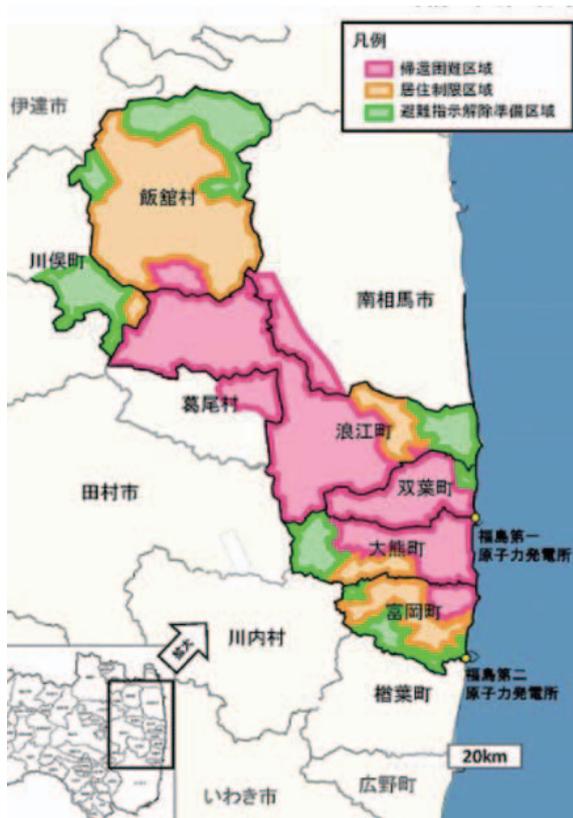


図1 福島第一原発事故居住制限区域

## 2. 仮設住宅でのコミュニティを育てる

施設で暮らしていた入所者の方たちは、最終的に福島県内の他の施設や新潟県長岡市の施設などに分散して避難生活を送ることとなりまし

た。一方、突然戻る家を無くした富岡町民のための仮設住宅が郡山市やいわき市に建設され、Nさんがいわき市内の仮設住宅に入居したのは平成23年9月のことでした。その敷地に建てられた仮設住宅の総戸数は220戸でしたが、Nさんが顔見知りだったお宅はたった1軒しかなかったそうです。同じ富岡町に住んでいたからといって、最初から人と人とのつながりがあったわけではありませんでした。220軒のご家族には220通りの震災以前の暮らしがあり、震災後にはこの仮設住宅にたどり着くまで220通りの避難生活があったわけです。

このような状況の仮設住宅団地に対して最初に支援を申し出たのが、近くにあるキリスト教団の日本聖公会の牧師さんたちです。お互いに知らない家族同士が、窓を開ければ隣の家の中まで見えてしまうような仮設住宅団地で共に生活していくためには、コミュニティを作り上げていくことが不可欠です。聖公会では、仮設住宅内に建てられた集会施設を利用し、コーヒーを飲みながらおしゃべりができる「ほっこりカフェ」をスタートさせました(写真2)。Nさん



写真2 ほっこりカフェのお知らせ

# 地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

私たちはこのほっこりカフェの運営を自分たちでやろう、自分たちでやらなければと考え、コーヒーと水の提供だけは聖公会にお願いし、あとは自分たちのお金で運営することにしました。紙コップ代節約のためマイカップ持参で来てください、1回50円でも100円でもいいから募金をしてくださいというルールで、月曜日と金曜日の週2回、5年間にわたってほっこりカフェを続けてきました。カフェの運営を手伝ってくれる住民も増え、コーヒーだけでなく、手作りのカレーや漬物などを持ち寄っておしゃべりしながら同じ時を過ごす場は、たくさんの人たちの心を癒してきました。私も何度かお邪魔したことがあります。一人暮らしの男性の参加も多く、仮設住宅での孤立を防ぐためにもこの試みは大きな役割を果たしてきたことは想像に難くありません。



### 3. 仮設住宅生活の卒業

週2回、5年間も続けられてきたほっこりカフェも、10月からは金曜日の1回だけ開かれることになりました。その理由は、あまり居心地をよくしてしまうと仮設住宅を出て行く時期が

遅れてしまうという心配があるためです。Nさんは仮設に住む方からこれからの生活をどうするか相談された時には、「子どもたちが一緒に住もうと言ってくれた時に行かなければ、戻れなくなるよ」という話をすることもあるそうです。当初220戸あったこの仮設住宅団地も、現在では90戸にまで居住者が減りました。それぞれ新しい家を建てたり、子供世帯と同居したりと、新たな住まいを確保し仮設住宅を退去していった人が6割近くにまで達したのです。しかし今でもほっこりカフェには、仮設住宅を卒業していった方たちがたくさん遊びに来てくれるのですが、これは非常に珍しいことだと思いました。なぜならばこれまで幾度も、「仮設住宅を退去してしまうと、仮設住宅に顔を出しにくくなる、自分は出てしまったという負い目を感じる」という被災者の声を聞いていたからです。

特に原発事故による避難生活を送っている方たちは居住制限の区分によって、東京電力からの慰謝料や賠償金に大きな差があり、また今後の帰還可能性の見通しも異なります。住み慣れた場所に戻る可能性がほとんど無い人と、あと何年かすれば戻れるかもしれないと希望を持つ人が、道路1本を隔てて分けられているのが現実です。お互いにこのような不公平感を抱くこともあるでしょうが、それを乗り越えて新たな生活に踏み出す後押しをするために、被災者の方たちが主体となって長い努力が積み重ねられてきました。ある日突然、理不尽な理由で住み慣れたコミュニティを奪われ、色々なものが壊された人たちが新たなコミュニティを築き、さらにそのコミュニティから旅立っていくことを支援するコミュニティ。Nさんたちがたどってきた震災以降の道のりは、改めてコミュニティの役割、あるべき姿を私たちに教えてくれる貴重な教科書となっています。